Red Hat Quay 3.11

Red Hat Quay リリースノート

Red Hat Quay

Last Updated: 2024-04-05

Red Hat Quay 3.11 Red Hat Quay リリースノート

Red Hat Quay

法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at
http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/
. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux ® is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java ® is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS ® is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL ® is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js ® is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack ® Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

Red Hat Quay リリースノート

目次

はじめに 3

第1章 RED HAT QUAY リリースノート 4

1.1. RHBA-2024:1475 - RED HAT QUAY 3.11.0 リリース 4
1.2. RED HAT QUAY のリリース頻度 4
1.3. RED HAT QUAY ドキュメントの変更 4
1.4. RED HAT QUAY の新機能と機能強化 4
1.5. RED HAT QUAY OPERATOR の更新 6
1.6. 新しい RED HAT QUAY 設定フィールド 6
1.7. 新しい API エンドポイント 7
1.8. RED HAT QUAY 3.11 の既知の問題と制限 7
1.9. 主な技術上の変更点 10
1.10. RED HAT QUAY のバグ修正 10
1.11. RED HAT QUAY 機能トラッカー 11

はじめに

Red Hat Quay コンテナーレジストリープラットフォームは、コンテナーとクラウドネイティブアーティファクトの安全なストレージ、配布、およびガバナンスをあらゆるインフラストラクチャーに提供します。スタンドアロンコンポーネントとして、または OpenShift Container Platform の Operator として利用できます。Red Hat Quay には、以下の機能と利点が含まれています。

- 詳細なセキュリティー管理
- あらゆる規模で高速かつ堅牢
- 高速 CI/CD
- インストールおよび更新の自動化
- エンタープライズ認証およびチームベースのアクセス制御
- OpenShift Container Platform 統合

Red Hat Quay は、新機能、バグ修正およびソフトウェアの更新を含め、定期的にリリースされます。スタンドアロンおよび OpenShift Container Platform デプロイメントの両方で Red Hat Quay をアップグレードするには、Red Hat Quay のアップグレード を参照してください。

重要

Red Hat Quay は、以前の z-stream バージョン (3.7.2 → 3.7.1 など) へのロールバックまたはダウングレードのみをサポートします。以前の y-stream バージョン (3.7.0 → 3.6.0) へのロールバックはサポートされていません。これは、Red Hat Quay の更新に、Red Hat Quay の新しいバージョンにアップグレードするときに適用されるデータベーススキーマのアップグレードが含まれている可能性があるためです。データベーススキーマのアップグレードでは下位互換性は保証されていません。

以前の z-stream へのダウングレードは、Operator ベースのデプロイメントでも仮想マシンベースのデプロイメントでも推奨もサポートもされていません。ダウングレードは、非常事態でのみ行う必要があります。Red Hat Quay サポートおよび開発チームと協力してRed Hat Quay デプロイメントをロールバックするかどうかを決定する必要があります。詳細は、Red Hat Quay サポートにお問い合わせください。

Red Hat Quay のドキュメントは、リリースごとにバージョン管理されています。最新の Red Hat Quay ドキュメントは、Red Hat Quay ドキュメント ページから入手できます。現在、バージョン 3 が最新のメジャーバージョンです。

注記

バージョン 2.9.2 より前は、Red Hat Quay は Quay Enterprise と呼ばれていました。2.9.2 以前のバージョンのドキュメントは、Red Hat Quay 2.9 の製品ドキュメント ページにアーカイブされています。

第1章 RED HAT QUAY リリースノート

以下のセクションでは、**y** および **z** ストリームのリリース情報を詳しく説明します。

1.1. RHBA-2024:1475 - RED HAT QUAY 3.11.0 リリース

発行日: 2024 年 4 月 2 日

Red Hat Quay リリース 3.11 が Clair 4.7.2 で利用できるようになりました。この更新に含まれるバグ修正は、RHBA-2024:1475 アドバイザリーにリストされています。

1.2. RED HAT QUAY のリリース頻度

Red Hat Quay 3.10 リリースより、この製品のリリース頻度とライフサイクルを OpenShift Container Platform に合わせて調整することを開始しました。その結果、Red Hat Quay リリースは、OpenShift Container Platform の最新バージョンから約 4 週間以内に一般提供 (GA) されるようになりました。Red Hat Quay のサポートライフサイクルフェーズが、OpenShift Container Platform リリースに合わせて調整される予定はありません。

詳細は、Red Hat Quay ライフサイクルポリシー を参照してください。

1.3. RED HAT QUAY ドキュメントの変更

Red Hat Quay 設定ツールはバージョン 3.10 以降では非推奨になりました。このリリースにより、設定ツールを使用する参照と手順が削除され、まだ削除されていな分は今後削除される予定です。これらの手順は、Red Hat Quay の古いバージョンでは使用されています。

1.4. RED HAT QUAY の新機能と機能強化

Red Hat Quay に対して次の更新が行われました。

1.4.1. AWS STS on Red Hat Quay のサポート

Amazon Web Services (AWS)Security Token Service (STS) のサポートが Red Hat Quay で提供されるようになりました。AWS STS は、AWS アイデンティティーおよびアクセス管理 (IAM) ユーザー、認証したユーザー、または **フェデレーションユーザー** に対して、一時的な制限付き権限の認証情報をリクエストするための Web サービスです。この機能は、Amazon S3 をオブジェクトストレージとして使用するクラスターに役立ち、Red Hat Quay は STS プロトコルを使用して Amazon S3 で認証できます。これにより、クラスターの全体的なセキュリティーが強化され、機密データへのアクセスが適切に認証および承認される際に役立ちます。この機能は、OpenShift Container Platform デプロイメントでも利用できます。

スタンドアロンの AWS STS for Red Hat Quay デプロイメントを設定する方法の詳細は、AWS STS for Red Hat Quay の設定 を参照してください。

1.4.2. Red Hat Quay 自動プルーニングの機能拡張

Red Hat Quay 3.10 のリリースに伴い、新しい自動プルーニング機能がリリースされました。この機能により、Red Hat Quay 管理者は、ユーザーと組織の両方の名前空間に自動プルーニングポリシーをセットアップできます。

このリリースにより、指定されたリポジトリーに自動プルーニングポリシーをセットアップできるようになりました。この機能を使用すると、指定した基準に基づいて、リポジトリー内のイメージタグを自

動的に削除できます。さらに、Red Hat Quay 管理者は、**admin** 権限を持つリポジトリーに対して自動プルーニングポリシーを設定できます。

詳細は、Red Hat Quay 自動プルーニングの概要 を参照してください。

1.4.3. Red Hat Quay v2 UI の機能拡張

Red Hat Quay 3.8 では、新しい UI がテクノロジープレビュー機能として導入されました。Red Hat Quay 3.11 では、v2 UI に次の機能拡張が加えられました。

1.4.3.1. Red Hat Quay v2 UI 使用状況ログ

Red Hat Quay 3.11 では、v2 UI を使用する際の使用状況ログに機能が追加されました。使用状況ログには、Red Hat Quay デプロイメントに関する次の情報が提供されます。

- **チーム活動のモニタリング** 管理者は、チームの作成、メンバーシップの変更、ロールの割り当てなどのチームアクティビティーを表示できます。
- **タグ履歴アクションの監査** セキュリティー監査者は、タグの作成、更新、削除などのタグ履歴アクションを監査できます。
- **リポジトリーラベル変更の追跡** リポジトリー所有者は、ラベルへの変更 (追加、修正、削除など) を追跡できます。
- **有効期限設定のモニタリング** エンジニアは、有効期限の設定や特定タグの有効期限の無効化など、タグの有効期限設定に関連するアクションを監視できます。

ログはメールアドレスまたはコールバック URL にエクスポートでき、組織、リポジトリー、名前空間レベルで利用できます。

詳細は、Red Hat Quay v2 UI での使用状況ログの表示 を参照してください。

1.4.3.2. Red Hat Quay v2 UI のダークモード

Red Hat Quay 3.11 では、v2 UI を使用する際にライトモードとダークモードを切り替える機能が、ユーザーに提供されます。この機能にはモードの自動選択も含まれ、ユーザーのブラウザーの設定に応じてライトモードまたはダークモードを選択します。

詳細は、Red Hat Quay v2 UI でのカラーテーマ設定の選択 を参照してください。

1.4.3.3. Red Hat Quay v2 UI でのビルドサポート

v2 UI を使用する場合、Red Hat Quay ビルドがサポートされるようになりました。コンテナーイメージをビルドする前に、**config.yaml** ファイルで **FEATURE_BUILD_SUPPORT: true** を設定して、この機能を有効にする必要があります。

詳細は、新しいビルドの作成 を参照してください。

1.4.3.4. リポジトリーの自動プルーニング v2 UI

Red Hat Quay 3.11 では、v2 UI を使用して自動プルーニングポリシーを作成する機能がユーザーに提供されます。

詳細は、Red Hat Quay 自動プルーニングの概要 を参照してください。

1.4.4. Red Hat Quay OIDC によるチーム同期のサポート

このリリースにより、OIDC プロバイダーが ID トークンまたは **/userinfo** エンドポイントからのグループ情報の取得をサポートしている限り、管理者は OpenID Connect (OIDC) アイデンティティープロバイダーを利用して、チームまたはグループの設定を同期できます。管理者は、スケーラブルではない Red Hat Quay と OIDC グループ間でグループ定義を手動で作成して同期することなく、リポジトリー権限をユーザーセットに簡単に適用できます。

詳細は、Red Hat Quay OIDC デプロイメントのチーム同期 を参照してください。

1.5. RED HAT QUAY OPERATOR の更新

Red Hat Quay Operator に対して以下の更新が行われました。

1.5.1. OpenShift Container Platform 管理対象コンポーネント上の Red Hat Quay に対する設定可能なリソース要求

このリリースにより、ユーザーは、Pod が実行されている次のコンポーネントに対して、OpenShift Container Platform 上の Red Hat Quay のリソース要求を手動で調整できます。

- **quay**
- **clair**
- **ミラーリング**
- **clairpostgres**
- **postgres**

この機能により、ユーザーはより小規模なテストクラスターを実行したり、**Quay** Pod の機能が部分的に低下するのを避けるために事前にさらに多くのリソースを要求したりできるようになります。

詳細は、OpenShift Container Platform 上の管理対象コンポーネントのリソースの設定 を参照してください。

1.5.2. OpenShift Container Platform 上の AWS STS on Red Hat Quay のサポート

OpenShift Container Platform 上の Red Hat Quay デプロイメントで、Amazon Web Services (AWS) Security Token Service (STS) のサポートが提供されるようになりました。AWS STS は、AWS アイデンティティーおよびアクセス管理 (IAM) ユーザー、認証したユーザー、または **フェデレーションユーザー** に対して、一時的な制限付き権限の認証情報をリクエストするための Web サービスです。この機能は、Amazon S3 をオブジェクトストレージとして使用するクラスターに役立ち、Red Hat Quay は STS プロトコルを使用して Amazon S3 で認証できます。これにより、クラスターの全体的なセキュリティーが強化され、機密データへのアクセスが適切に認証および承認される際に役立ちます。

OpenShift Container Platform 上の AWS STS for Red Hat Quay に関する詳細は、OpenShift Container Platform 上の AWS STS for Red Hat Quay の設定 を参照してください。

1.6. 新しい RED HAT QUAY 設定フィールド

Red Hat Quay 3.11 に次の設定フィールドが追加されました。

1.6.1. AWS S3 STS デプロイメントの設定フィールド

AWS STS for Red Hat Quay を設定する際に、次の設定フィールドが追加されました。これらのフィールドは、デプロイメント用に AWS S3 ストレージを設定するときに使用されます。

- **.sts_role_arn** AWS STS for Red Hat Quay を設定するときに必要な一意の Amazon Resource Name (ARN)。
- **.sts_user_access_key** AWS STS for Red Hat Quay を設定するときに必要な、生成された AWS S3 ユーザー秘密鍵。
- **.sts_user_secret_key** Red Hat Quay の AWS STS を設定するときに必要な、生成された AWS S3 ユーザー秘密鍵。

詳細は、AWS STS S3 ストレージ を参照してください。

1.6.2. チーム同期の設定フィールド

OIDC 機能によるチーム同期のために、次の設定フィールドが追加されました。

- **PREFERRED_GROUP_CLAIM_NAME**: ユーザーのグループメンバーシップに関する情報を保持する OIDC トークンペイロード内のキー名。

1.7. 新しい API エンドポイント

Red Hat Quay 3.11 には、次の API エンドポイントが追加されました。

1.7.1. リポジトリー自動プルーニングポリシーのエンドポイント

リポジトリーの自動プルーニングポリシー機能では、次の API エンドポイントが導入されています。

- ***/api/v1/repository/<organization_name>/<repository_name>/autoprunepolicy/**
  この API エンドポイントは、**POST**、**GET**、**DELETE** 呼び出しで使用して、リポジトリー上の自動プルーニングポリシーをそれぞれ作成、表示、削除できます。
- ***/api/v1/repository/<user_account>/<user_repository>/autoprunepolicy/**
  この API エンドポイントは、**POST**、**GET**、および **DELETE** 呼び出しで使用して、組織内の特定ユーザーのリポジトリーで、自動プルーニングポリシーを作成、表示、削除できます。これらのコマンドを使用する場合は、ポリシーを作成するリポジトリーに対する **admin** 権限を持っている必要があることに注意してください。

1.8. RED HAT QUAY 3.11 の既知の問題と制限

次のセクションでは、Red Hat Quay 3.11 の既知の問題と制限について説明します。

1.8.1. Red Hat Quay OIDC チーム同期の既知の問題

1.8.1.1. User Settings ページでユーザーパスワードを設定できない

Red Hat Quay が、Microsoft Entra ID (以前の Azure Active Directory) で認証タイプとして OIDC を使用する場合、既知の問題が発生します。

Red Hat Quay にログインした後、ユーザーは **User Settings** ページでパスワードを設定できません。これは、Docker/Podman CLI を使用してレジストリーへのイメージのプッシュまたはプル操作を実行するときの認証に必要です。

回避策として、OIDC 経由で認証するときに、Docker CLI とアプリケーショントークンを認証情報として使用できます。これらのトークンは、ロボットトークンとともにパスワードの代わりとして機能し、OIDC 経由で認証するときに Red Hat Quay へのアクセスを提供するための規定の方法と見なされます。

詳細は、PROJQUAY-6754 を参照してください。

1.8.1.2. OIDC ユーザーが OIDC から削除されると変更を同期できない

現在、OIDC ユーザーが OIDC プロバイダーから削除されても、そのユーザーは Red Hat Quay のチームから削除されません。したがって、レジストリーからイメージをプッシュおよびプルするには、ロボットアカウントトークンとアプリケーショントークンを引き続き使用する必要があります。予想される動作として、OIDC グループから削除されると、そのユーザーおよび関連するトークンが Red Hat Quay から削除されるはずです。これは既知の問題であり、Red Hat Quay の今後のバージョンで修正される予定です。(PROJQUAY-6842)

1.8.1.3. OIDC プロバイダーが Microsoft Entra ID の場合は、オブジェクト ID を使用する必要がある

Microsoft Entra ID を OIDC プロバイダーとして使用する場合、Red Hat Quay 管理者は、グループ名ではなく OIDC グループの **オブジェクト ID** を入力する必要があります。v2 UI では現在、Microsoft Entra ID ユーザーは OIDC グループのオブジェクト ID を入力する必要があることをユーザーに警告していません。これは既知の問題であり、Red Hat Quay の今後のバージョンで修正される予定です。(PROJQUAY-6917)

1.8.2. STS S3 ストレージの既知の問題

プロキシーストレージを有効にした Amazon Web Services (AWS) Security Token Service (STS) を使用すると、ユーザーはイメージをプルできず、**Error: copying system image from manifest list: parsing image configuration: fetching blob: received unexpected HTTP status: 502 Bad Gateway** のエラーが返されます。これは既知の問題であり、Red Hat Quay の今後のバージョンで修正される予定です。

1.8.3. OpenShift Container Platform 上の Red Hat Quay 3.8 を 3.11 に直接アップグレードする場合の制限

OpenShift Container Platform 上の Red Hat Quay 3.8 は、3.11 にアップグレードできません。ユーザーは、OpenShift Container Platform 上の Red Hat Quay を 3.8 から 3.9 または 3.10 にアップグレードしてから、3.11 へアップグレードする必要があります。

詳細は、Red Hat Quay のアップグレード を参照してください。

1.8.4. 設定可能なリソース要求制限

Quay Pod のリソース制限を低く設定しすぎると、Pod が起動できなくなり、**OOMKILLED** および **CrashLoopBackOff** のステータスが返されます。リソース制限は、OpenShift Container Platform での管理対象コンポーネントのリソースの設定 ページに記載されている最小要件よりも低く設定することはできません。

1.8.5. Red Hat Quay v2 UI の既知の問題

Red Hat Quay チームは、v2 UI に関する次の既知の問題を把握しています。

- PROJQUAY-6910 新しい UI では、使用状況ログのグラフをグループ化したりスタックしたりできません。
- PROJQUAY-6909 新しい UI では、使用状況ログのグラフの表示を切り替えることができません。
- PROJQUAY-6904 "Permanently delete" タグは新しい UI では復元されません。
- PROJQUAY-6899 FEATURE_SUPERUSERS_FULL_ACCESS を有効にすると、一般ユーザーは新しい UI で組織を削除できなくなります。
- PROJQUAY-6892 新しい UI は、不要なストライプとステータスページを呼び出さないようにする必要があります。
- PROJQUAY-6884 新しい UI では、Slack 通知を作成するときに Slack Webhook URL のヒントが表示されるはずです。
- PROJQUAY-6882 新しい UI のグローバル読み取り専用スーパーユーザーは、すべての組織とイメージリポジトリーを表示できません。
- PROJQUAY-6881 新しい UI は、ログチャートにすべての操作タイプを表示できません。
- PROJQUAY-6861 対象組織の設定が更新された後、組織の新しい UI "Last Modified" には常に N/A が表示されます。
- PROJQUAY-6860 新しい UI は、組織のマシン設定が使用状況ログで NULL と表示する時間を更新します。
- PROJQUAY-6859 新しい UI では、イメージリポジトリーの権限を削除すると、監査ログの組織名に "undefined" と表示されます。
- PROJQUAY-6854 「デバイスベースのテーマ」は Firefox のデザインとして機能しません。
- PROJQUAY-6852 ビルドトリガーセットアップウィザードの "Tag manifest with the branch or tag name" オプションは、デフォルトでチェックされる必要があります。
- PROJQUAY-6832 新しい UI では、OIDC ディレクトリー同期を有効にするときに OIDC グループ名を検証する必要があります。
- PROJQUAY-6831 チームが OIDC グループからの同期で設定されている場合、新しい UI に招待タブは表示されません。
- PROJQUAY-6830 新しい UI では、チームが OIDC グループからのチームメンバーの同期で設定されている場合に、同期アイコンが表示されます。
- PROJQUAY-6829 OIDC グループからの同期でチームに追加された新しい UI チームメンバーは、組織ログページで監査される必要があります。
- PROJQUAY-6825 新しい UI では、ビルドキャンセル操作ログが正しく表示されません。
- PROJQUAY-6812 新しい UI では、ログページのビルドイメージの "performer by" が NULL になっています。
- PROJQUAY-6810 新しい UI では、ログページでタグ名とタグアイコンが強調表示されるようになります。
- PROJQUAY-6808 新しい UI では、ロボットアカウントをクリックしてログページに認証情報を表示できません。

- PROJQUAY-6807 新しい UI では、Quay がダークモードの場合、ログページで操作の種類を表示できません。
- PROJQUAY-6770 Docker ファイルをアップロードして新しい UI ビルドイメージを作成する場合、.tar.gz または.zip をサポートする必要があります。
- PROJQUAY-6769 新しい UI では、ビルドトリガーのセットアップが完了した後に "Trigger setup has already been completed" というメッセージは表示されません。
- PROJQUAY-6768 新しい UI では、イメージビルドから現在のイメージリポジトリーに戻ることはできません。
- PROJQUAY-6767 新しい UI では、ビルドログをダウンロードできません。
- PROJQUAY-6758 新しい UI では、異なる操作タイプにマウスを移動したときに正しい操作番号が表示されます。
- PROJQUAY-6757 新しい UI では、使用状況でタグの有効期限が日付形式で表示されます。

1.8.5.1. Red Hat Quay v2 UI ダークモードの既知の問題

ユーザーのブラウザー設定に応じてライトモードまたはダークモードを選択するモードの自動選択を使用している場合、オペレーティングシステムの外観は、ブラウザーの Web サイトの外観設定によってオーバーライドされます。デバイスベースのテーマが期待どおりに動作しない場合は、ブラウザーの外観設定を確認してください。これは既知の問題であり、Red Hat Quay の今後のバージョンで修正される予定です。(PROJQUAY-6903)

1.9. 主な技術上の変更点

3.11 では、Red Hat Quay に次の技術的な変更が加えられました。

1.9.1. PgBouncer のサポートの削除

Red Hat Quay 3.11 は PgBouncer をサポートしていません。

1.9.2. IBM Power、IBM Z、IBM® LinuxONE サポートマトリクスの変更

IBM Power、IBM Z、IBM® LinuxONE の一部の機能に対するサポートが変更されました。詳細は、「IBM Power、IBM Z、および IBM® LinuxONE サポートマトリクス」の表を参照してください。

1.10. RED HAT QUAY のバグ修正

Red Hat Quay 3.11 では次の問題が修正されました。

- PROJQUAY-6586 Ceph/RADOS ドライバーで大きなレイヤーのアップロードが失敗します。
- PROJQUAY-6648 アプリケーショントークンの Docker/Podman ログインコマンドが Windows で失敗します。
- PROJQUAY-6673 マニフェストリスト内の子マニフェストに IGNORE_UNKNOWN_MEDIATYPE を適用します。
- PROJQUAY-6619 さまざまな UI 画面でスクロールバーが重複します。
- PROJQUAY-6235 ミラーおよび読み取り専用リポジトリーは削除しないでください。

- PROJQUAY-6243 Quay.io でリポジトリーの説明を編集できません。
- PROJQUAY-5793 リポジトリーにマニフェストとマニフェストリストが含まれている場合、タグビューの Next page ボタンが正しく機能しません。
- PROJQUAY-6442 新しい UI: チームページのパンくずリスト。
- PROJQUAY-6247 [New UI] メニュー項目の命名規則は「最初の文字を大文字にする」というスタイルに従っていません。
- PROJQUAY-6261 既存のロボットアカウントを入力すると、ロボットアカウント存在エラーが発生します。
- PROJQUAY-6577 カスタマイズが適用されている場合、Quay Operator は適切な Clair config.yaml をレンダリングしません。
- PROJQUAY-6699 Red Hat Quay Operator の説明のリンクが切れています。
- PROJQUAY-6841 405 のため、ビルド用の dockerfile をアップロードできません。

1.11. RED HAT QUAY 機能トラッカー

Red Hat Quay に新機能が追加され、その一部は現在テクノロジープレビューにあります。テクノロジープレビュー機能は実験的な機能であり、本番環境での使用を目的としたものではありません。

以前のリリースで利用可能であった一部の機能が非推奨になるか、削除されました。非推奨の機能は引き続き Red Hat Quay に含まれていますが、今後のリリースで削除される予定であり、新しいデプロイメントには推奨されません。Red Hat Quay で非推奨および削除された機能の最新のリストについては、表 1.1 を参照してください。非推奨になったか、削除された機能の詳細情報は、表の後に記載されています。

表1.1 新機能トラッカー

機能	Quay 3.11	Quay 3.10	Quay 3.9
Red Hat Quay OIDC デプロイメントのチーム同期	一般公開 (GA)	-	-
OpenShift Container Platform 上の管理対象コンポーネントのリソースの設定	一般公開 (GA)	-	-
AWS STS for Red Hat Quay の設定、OpenShift Container Platform 上の AWS STS for Red Hat Quay の設定	一般公開 (GA)	-	-
Red Hat Quay リポジトリーの自動プルーニング	一般公開 (GA)	-	-
Red Hat Quay v2 UI でダークモードを設定する	一般公開 (GA)	-	-
ロボットアカウントの無効化	一般公開 (GA)	一般公開 (GA)	-

機能	Quay 3.11	Quay 3.10	Quay 3.9
Red Hat Quay 名前空間の自動プルーニング	一般公開 (GA)	一般公開 (GA)	-
単一サイト geo レプリケーションの削除	一般公開 (GA)	一般公開 (GA)	一般公開 (GA)
Splunk ログ転送	一般公開 (GA)	一般公開 (GA)	一般公開 (GA)
Nutanix オブジェクトストレージ	一般公開 (GA)	一般公開 (GA)	一般公開 (GA)
FEATURE_UI_V2	テクノロジープレビュー	テクノロジープレビュー	テクノロジープレビュー
Clair を使用した Java スキャン	テクノロジープレビュー	テクノロジープレビュー	テクノロジープレビュー

1.11.1. IBM Power、IBM Z、IBM® LinuxONE サポートマトリクス

表1.2 サポート対象およびサポート対象外の機能のリスト

機能	IBM Power	IBM Z および IBM® LinuxONE
OIDC 経由の Azure 上での チーム同期を許可する	サポート対象外	サポート対象外
スタンドアロンデプロイメントでのバックアップと復元	サポート対象	サポート対象
geo レプリケーション (スタンドアロン)	サポート対象外	サポート対象
geo レプリケーション (Operator)	サポート対象外	サポート対象外
IPv6	サポート対象外	サポート対象外
スタンドアロンデプロイメントから Operator デプロイメントへの移行	サポート対象	サポート対象
ミラーレジストリー	サポート対象外	サポート対象外
pgBouncer による PostgreSQL 接続プール	サポート対象	サポート対象
Quay 設定エディター - ミラー、OIDC	サポート対象	サポート対象

機能	IBM Power	IBM Z および IBM® LinuxONE
Quay 設定エディター - MAG、Kinesis、Keystone、GitHub Enterprise	サポート対象外	サポート対象外
Quay 設定エディター - Red Hat Quay V2 ユーザーインターフェイス	サポート対象	サポート対象
リポジトリーミラーリング	サポート対象	サポート対象